

176B.茯苓飲合半夏厚朴湯

参考文献名		茯苓	朮	白朮	人参	生姜	乾姜	陳皮	橘皮	枳実	半夏	厚朴	紫蘇葉
診療医典	注1	6	4	-	3	4	-	3	-	1.5	6	3	2
治療の実際	注2	6	4	-	3	4	-	3	-	1.5	6	3	2
処方解説	注3	5	-	4	3	-	1.5	3	-	1.5	6~8	3	2
漢方処方集	注4	4	-	3	3	5	-	-	2.5	2	10	3	2
応用の実際	注5	5	4	-	3	4	-	3	-	1.5	6	3	2
漢方保健診療の実際		5	4		3	4		3		1.5	6	3	2

注1 胃腸が弱く胃にガスが充満し、腹部に膨満感があるため食欲がないものの胃炎、胃下垂症、胃アトニー症、神経症、血の道症、気管支ぜんそく、気管支炎、百日咳、妊娠つわりなどに用いる。

注2 発作性の心悸亢進、不安感、とり越し苦労など訴えるものなどの咽喉の異物感、嚥下困難。

注3 胃液分泌過多症、胃腸虚弱症、扁桃炎、嘔声、咽喉刺激感。

注4 溜飲のもの、胃性神経衰弱、神経性食道狭窄、更年期障害、ヒステリー、パセドウ氏病、急性慢性気管支炎、食道浮腫、声門浮腫、陰嚢水腫。

注5 小児消化不良、食道痙攣、神経性心気症。

処方番号：177

処方名：茯苓杏仁甘草湯（ぶくりょうきょうにんかんぞうとう）

処方構成：

茯苓 3-6、杏仁 2-4、甘草 1-2

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度以下から虚弱で、胸につかえがあるものの次の諸症

効能・効果：

息切れ、胸の痛み、喘息、せき、動悸

原典：金匱要略

出典：

解説：

本方は基本的には陽証で、やや虚証の者が目標となるが、幅広く用いて良い方剤である。

原典である『金匱要略』には「胸痺、胸中気塞がり、短気す」と記されている。「短気」とは呼吸促進のことで、ヒューヒュー・ゼーゼーと息苦しく呼吸数が増すことである。

『医聖方格』には「胸中気塞がり、短気し、喘息するは、茯苓杏仁甘草湯之を主る」とあり、喘息による呼吸困難に用いることが明記されている。また『漢方処方解説』には「胸隔内に循環障害と、呼吸障害が起こって、胸の中に気がふさがったように感じ、呼吸困難を訴えるものに用いる。」と具体的な適応病態が述べられている。

『勿誤薬室方函口訣』には上記の諸症状の他に、打撲によって身体が痛み、歩行すると息苦しくなる者にも効果があることが記されている。

本方は虚証の者が目標となることを冒頭に述べたが、類似の症状を示し、実証の場合には木防已湯とその類方が用いられる。

177.茯苓杏仁甘草湯

参考文献名		茯苓	杏仁	甘草	用法・用量
漢方診療医典	注1	6	4	1	
臨床応用漢方処方解説	注2	6	4	1-2	
金匱要略入門	注3	2	5個	1	*1
新版漢方医学		6	4	1	
症候による漢方治療の実際	注4	6	4	1	
漢方と民間薬百科	注5	6	4	2	
続漢方治療百話	注6	6	4	1	
漢方治療百話第三集	注7	6	4	1	
経験・漢方処方分量集		6	4	1	
改訂新版漢方処方集	注8	3	2	1	*2
漢方入門講座上・下	注9	3	2	1	
新撰類聚方	注10	3兩	50個	1兩	*3
現代漢方入門	注11	6	4	1	
漢方古方要方解説	注12	6	4	2	*4
漢方精撰百八方	注13	6	4	2	
成人病の漢方療法		6	4	1	
1000万人の漢方診断と治療の実際	注14	6	4	1	
実用漢方療法	注15	6	4	1	
明解漢方処方集	注16	6	4	1	

*1 水1000耗を以て煮て500耗となし、100耗を温服すること1日3回せよ。軽快しないときは更に服用せよ。

*2 水四〇〇を以て二〇〇に煮つめ三回に分服。

*3 水一斗を以て煮て五升を取り、一升を温服する。三回に分服。軽快しないときは更に服用する。

*4 水一合二勺を以て煮て六勺を取り、滓を去りて一回に温服す。(通常一日二、三回)

注1

・心臓弁膜症：病勢がはげしくて、呼吸促迫、喘咳、浮腫があり、胸がふさがった感じが強く、味の重い薬がおさまらないものに用いる。

注2

・胸隔内に循環障害と、呼吸障害が起こって、胸の中に気がふさがったように感じ、呼吸困難を訴えるものに用いる。

・本方は主として気管支喘息・心臓喘息・肺気腫・肺結核・気胸・肋膜炎等に用いられる。

注3

・胸痺で、胸廓内に閉塞感があり、呼吸困難を訴えるときは、茯苓杏仁甘草湯の本格指示である。

注4

・この方は金匱要略の方で“胸痺、胸中気塞、短気、茯苓杏仁甘草湯之を主る”とあって、胸が塞がったように痛んで、呼吸を促迫するものに用いる。

注5

・動悸、息切れ、喘鳴があつて、胸がふさがった様に苦しく、尿の出が少なく、ときには浮腫があらわれるもの。

・応用：心不全、心臓神経症、肺気腫。

注6

・病勢があまり激しく、呼吸促迫、喘咳、浮腫、胸内痞塞感のあるもので心下はそれ程堅くならず、この淡白な薬で一時の様子を見るとときによい。

注7

・茯苓杏仁甘草湯は、胸隔内に循環障害と、呼吸障害が起こり、胸の中に気がふさがったように感じ、呼吸困難を訴えるものに用いる。

・本方は気管支喘息、心臓性喘息、肺気腫、肺結核、気胸、肋膜炎等に用いられる。

注8

・胸中気塞がり息が切れるものを目標とする。

・気管支喘息、打撲症、肋間神経痛に用いられる。

注9

・「胸痺、胸中気塞、短気するは茯苓杏仁甘草湯之を主る。(金匱要略胸痺)」

・気管支喘息、心臓喘息、肺結核、肺気腫、気胸、肋膜炎、肋間神経痛等に使う機会がある。

注10

・気管支喘息、心臓喘息、肺結核、肺気腫、気胸、肋膜炎、肋間神経痛等で胸がつまるように苦しく息が切れ或いは咳し或いは痛むもの。

注11

・ゼンソク、肺気腫、狭心症、食道狭窄

注12

・気管支喘息等にして、胸中填塞の感強く、氣息將に絶せんとするの状ありと訴ふる者。心臓性喘息等にして、脈沈微なる証、軽症狭心症、及び其の類似疾患。心臓神経症等。軽症心臓瓣膜病等。肺気腫、及び其の類似疾患等

注13

・証には、心下悸し、胸中痺し、短気喘息する者、とある。即ち、心下が動悸し、呼吸促進し、喘咳があり、胸内塞がるが如き苦悶を感じ、脈沈微なる者、に適用される。

注14

・虚弱タイプにおこる弁膜症で、胸の中に何かつまっているような感じがあつて、呼吸促迫があり、咳と痰が出て、浮腫のあるものに用いる。

注15

・この処方目標は木防己湯の目標とほとんど変わらないが、脈とおなかの張りが木防己湯に比べてかなり弱い。

注16

・心臓性の症候で、先ず呼吸困難を主目標にし、そのほか浮腫、喘咳、狭心症などの症ある者に用いる。

・狭心症。心臓喘息。心臓性浮腫。

処方番号：178

処方名：茯苓四逆湯（ぶくりょうしぎやくとう）

処方構成：

茯苓 4、甘草 2-3、乾姜 1.5-3、人参 1-3、加工ブシ 0.3-1.5

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱あるいは体力が消耗し、手足が冷えるものの次の諸症

効能・効果：

倦怠感、急・慢性胃腸炎、下痢、吐き気、尿量減少

原典：傷寒論

出典：

解説：

本方は四逆湯（甘草・乾姜・附子）に人参と茯苓が加わった方剤である。原典である『傷寒論』には「発汗し、若しくは之を下し、病仍解せず、煩躁す」と記されている。厥陰病期の方剤で、四肢が冷え、新陳代謝が低下し、精神不穏状態を呈するものが目標となる。しかし、慢性的に経過する病症では、全身倦怠感、冷え、尿量減少、下痢傾向をめやすに広く応用される。

著しい倦怠感には補剤（補中益気湯、十全大補湯、人参養栄湯など）がよく用いられるが、陰証で冷えや、寒むけを伴うものには本方がよい。

178. 茯苓四逆湯

参考文献名	茯苓	甘草	乾姜	人参	附子	用法・用量
漢方診療医典 注1	4	2	2	2	0.5-1	
臨床応用漢方処方解説 注2	4	3	2	2	0.5-1	*1
傷寒論入門 注3	4	2	1.5	1	1.5	*2
症候による漢方治療の実際 注4	4	3	3	3	0.6	
続漢方治療百話	4	2	2	2	0.5-1	
経験・漢方処方分量集	4	2	2	2	1	
新撰類聚方 注5	4兩	2兩	1兩半	1兩	1枚	*3
漢方古方要方解説 注6	4.8	2.4	1.8	1.2	1.2	*4
実用漢方療法	4	2	2	2	0.3-1	

*1 水300ccをもって煮て150ccとし、1日2回に分けて温服する。

*2 水500耗を以て煮て200耗となし、濾過して70耗を温服すること1日3回せよ。

*3 水一合を以て煮て六勺を取り、滓を去り四回に分けて温服すべし。一日三回服用。

*4 水一合を以て煮て六勺を取り、滓を去りて一回に温服す。(通常一日二、三回)

注1

・四逆加人参湯に茯苓を加えた方剤で、四逆加人参湯証で、更に煩躁、心悸亢進、浮腫などの状がみられるものに用いる。

注2

・四逆加人参湯に茯苓を加えたもので、四逆加人参湯の証に煩躁、心悸亢進、浮腫等の状が加わったものに用いる。

注3

・発汗性、或いは排便性治癒転機を起こさせても、証候複合は依然として解消せず、煩躁する場合は、茯苓四逆湯の本格指示である。

注4

・重篤な病気でひどく脱汗したり吐いたり、下痢が続いたりして、体力が衰脱し、心臓も弱り、脈沈微、口渴等のあるものに用いる。

注5

・悶えて落ち着かざる者、甚だしく悪寒又はガタガタと慄へて止まざる者あり。口中カラカラに乾燥する者、水はよく吞みたがれ共、飲むこと能わず、汗多く出でる者、身體又は四肢に痛みある者、夜は眠り難き者、兎に角思ひの外に煩躁あるが目の付け所なり。

注6

・茯苓四逆湯の証として、傷寒論に挙ぐる所は、「発汗し、若しくは之を下し、病仍ほ解せず、煩躁する証。」なり。
・吉益東洞氏曰く「按ズルニ、当ニ心下ノ悸、悪寒ニ証有ルベシ」と。

処方番号：179

処方名：茯苓沢瀉湯（ぶくりょうたくしゃとう）

処方構成：

茯苓 4、沢瀉 4、白朮 3（蒼朮も可）、桂枝 2、生姜 1-1.5（ヒネショウガを使用する場合 3-5）、
甘草 1.5

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以下で、胃のもたれ、悪心、嘔吐のいずれかがあり、渴きを覚えるものの次の諸症

効能・効果：

胃炎、胃腸虚弱

原典：金匱要略

出典：

解説：

苓桂朮甘湯の附方と見なされる。五苓散の猪苓を去り、甘草、生姜を加えた処方である。沢瀉湯、苓桂朮甘湯、五苓散、茯苓甘草湯などとまぎれやすい処方である。本方は嘔吐して、のどがかわき、小便の少ないものに用いるが、五苓散証は、飲食した物がすぐに吐出する状態を呈するという点に違いがある。

生姜はヒネショウガを用いることが望ましい。

179. 茯苓沢瀉湯

参考文献名	茯苓	沢瀉	朮	白朮	桂枝	生姜	乾生姜	ひね生姜	甘草	用法・用量
処方分量集	4	4	3	-	2	3	-	-	1.5	
診療の実際	4	4	3	-	2	3	-	-	1.5	
診療医典 注1	4	4	3	-	2	3	-	-	1.5	
症候別治療	4	4	3	-	2	3	-	-	1.5	
処方解説	4	4	3	-	2	-	1.5	-	1.5	
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
応用の実際 注2	4	4	3	-	2	3	-	-	1.5	
明解処方	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
漢方処方集	8	4	-	3	2	4	-	-	1	
新選類聚方	8	4	-	3	2	4	-	-	2	
漢方入門講座	8	4	-	3	2	-	-	4	2	
漢方医学	4	4	3	-	2	3	-	-	1.5	
精撰百八方 注3	4	4	-	3	2	3	-	-	1.5	
古方要方解説 注4	4.8	2.4	1.8	-	1.2	2.4	-	-	1.2	*
成人病の漢方療法	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

* 1回分量 通常1日2, 3回服用

【注1】 本方は五苓散の猪苓の代りに甘草と生姜が入ったもので、口渴と利尿減少があつて、嘔吐を起こすことは、両方に共通であるが、嘔吐の様相がちがっている。五苓散にみられる水逆とよばれる嘔吐は、口渴があつて、水をのむと直ぐに、その水を吐くのが特徴で、茯苓沢瀉湯では、口渴があつて、水を呑んでも直ぐに吐くことはまれで、朝食を午後になって吐くというように、飲食してから吐くまでの間に時間の余裕がある。したがつて五苓散の嘔吐が頻々繰返して起こるのに反し、茯苓沢瀉湯の嘔吐は、1日1, 2回のことが多い。

【注2】 胃部に停滞感や悪心があり、食後しばらくして食べたものを吐き、のどがかわいて水をのむものである。しばしば上衝、頭痛、頭冒感、めまい(眩暈)、心悸亢進などがあつて利尿が減少する。腹部は全体にやや軟弱で、心下部に振水音をみとめる場合が多い。

【注3】 自覚的：胃部痞塞感、悪心があつて、食後しばらくして食したものを吐出し、のどがかわき、頭痛し、利尿減少の傾向がある。他覚的：脈浮ならず、沈ならずやや軟。舌 乾湿中等度の白苔が中等度。腹 腹力はやや軟弱で、上腹部に振水音を認める場合が多い。

【注4】 ……故に方極附言にいわく「心下悸シ、小便利セズ、上衝、嘔吐シ、渴シテ水ヲ飲マント欲スル者ヲ治ス」と。又、医聖方格にいわく「嘔吐止マズ、復タ吐シテ渴シ、水ヲ飲マント欲シ、其ノ人発熱シ、頭汗出テ、眩悸シ、小便疎通(尿通稀疎の意)ノ者ハ、茯苓沢瀉湯之ヲ主ドル」と。この二説、能く本方の効用を約言せりというべし。

処方番号：180

処方名：附子粳米湯（ぶしこうべいとう）

処方構成：

加工ブシ 0.3-1.5、半夏 5-8、大棗 2.5-3、甘草 1-2.5、粳米 6-8

用法・用量：

湯

しぼり：

体力虚弱で腹部が冷えて痛み、腹が鳴るものの次の諸症

効能・効果：

胃痛、腹痛、嘔吐、急性胃腸炎

原典：金匱要略

出典：

解説：

原典である『金匱要略』には「腹中雷鳴、切痛、胸脇逆満し、嘔吐す」と記されている。附子が主剤であることから、陰証で腹部の激痛を示すものが適応となる。

『漢方概論』には急性・慢性胃腸炎、腸疝痛、腸閉塞（イレウス）の他に熱中症にも応用されることが記されており、臨床上参考となる記述である。

本方と大建中湯を合わせたものを解急蜀椒湯（かいきゅうしょくしょとう）と言ひ、腹中の冷えが一層激しいものによい。

180.附子粳米湯

参考文献名		附子	炮附子	白川附子	半夏	甘草	大棗	粳米	玄米	用法・用量
漢方診療医典	注1	0.5-1			5	1.5	3	7		
漢方処方応用の実際	注2	0.6			5	1.5	3	6		
症候による漢方治療の実際	注3	0.6			5	1.5	3	6		
臨床応用漢方処方解説	注4	0.5-1			5	2.5	3	7		
金匱要略入門	注5		1.5		7.5	1	3	8		*1
漢方と民間薬百科	注6	1			5	1.5	3	7		
経験・漢方処方分量集		1			5	1.5	3	7		
改訂新版漢方処方分量集	注7		0.3	又は1	8	1	2.5		7	*2
漢方入門講座・1	注8	1			8	1	2.5		8	
漢方入門講座上・下	注9		0.3	又は1	5	1	2.5		7	
新撰類聚方	注10		1枚		半升	1両	10枚	半升		*3
成人病の漢方療法	注11	1			5	2.5	3	7		
1000万人の漢方診断と治療の実際	注12	1			5	2.5	3	7		
実用漢方療法	注13	0.3-1			5	1.5	3	7		
明解漢方処方集	注14	1			5	1.5	3	7		

*1 水800耗をもって、米の熟するまで煮て濾過し、100耗宛1日3回温服せよ。

*2 水320を以て煮て米が煮えたら滓を去り、3回に分服。

*3 水八升を以て煮て米が煮えたら滓を去り、一升を温服する。三回に分服。

注1

・本方は、腹部に冷感を覚えて、疼痛が激しい場合に用い、腹中が雷鳴して切痛するものを治する。

・本方は附子、半夏、甘草、大棗、粳米の5味からなり、附子は乾姜よりも高度の温性刺激薬で、鎮痛の効があり、半夏、粳米は嘔吐を止め、甘草、大棗は急迫症状を治し、附子と組んで疼痛を緩解する効がある。

・本方は、腸の痙攣、胃痙攣、腹膜炎等に用いる。

注2

・本方は、裏寒の虚証に用い、患者は体力のない、体内の冷える、新陳代謝が低下した状態である。

・本方証の腹痛は、原典に雷鳴切痛とあり、切るような激痛である。このような痛みは、腸内ガスによる腸の蠕動不安のための痛みや、胃痙攣のような発作性の痛みで、時に回虫を吐すこともある。

注3

・この方は、“腹中寒気、雷鳴切痛、胸脇逆満、嘔吐、附子粳米湯之を主る。”とある。

・この方は腹中の寒気が上につき、胸脇部に逆満してくるようである。ここでは雷鳴切痛とあって、腹がゴロゴロ鳴って、切られるように痛む。

注4

・腹中に寒冷を覚え、激しい疼痛を発する場合に用いる。

・腹中の雷鳴と、激甚なる疼痛、嘔吐、悪寒を目標とする。虚寒性の激しい腹痛と嘔吐で腹鳴をとまなうものである。

注5

・腹中は冷たく感じ、雷鳴し、切られる様に痛み、それが胸部及び側胸部にさし迫って、胸脇はつまったようで、嘔吐するときは、附子粳米湯の本格指示である。

注6

・腹が冷えて、切るような激しい腹痛を訴えるものに用いる。腹の痛いときに、腹がゴロゴロと鳴り、また吐くこともある。

注7

・腹冷、雷鳴切痛、胸脇に逆満し嘔多く吐少なきものを目標とする。

注8

・腹痛、腹満、腹鳴、嘔吐するものを治す。

注9

・虚寒性の激しい腹痛嘔吐に使う。腹鳴を伴う。
・「腹中寒気、雷鳴切痛、胸脇逆満、嘔吐、附子粳米湯之を主る。」(金匱要略寒疝)が之である。

注10

・腹中寒気、雷鳴切痛、胸脇逆満、嘔吐、附子粳米湯之を主る。

注11

・腹中が冷え、腹がゴロゴロなって刺すように痛むものに用いる。

注12

・腹中が冷え、腹がゴロゴロなって刺すように痛むものに用いる。

注13

・虫垂炎が進行して、もはや下してはいけなくて、組織や器官を暖めて、その働きを力づけ奮い起こさせるような処方を使わなければならない時期になった場合には、附子粳米湯などの、そのような働きのある処方にきりかえる。

注14

・本方は陽虚証の半夏瀉心湯類の腹中雷鳴に似てはいるが、黄芩、人参がないため、胃部の痞えて硬い症がなく、逆に腹痛の程度は劇しく、`切痛`というようにキリキリ激痛するので区別できる。また下痢せず大小便とも閉じることが多い。

処方番号：181

処方名：扶脾生脈散（ふひしょうみやくさん）

処方構成：

人参 2、当帰 4、芍薬 3-4、紫苑 2、黄耆 2、麦門冬 6、五味子 1.5、甘草 1.5

用法・用量：

湯

しぼり：

体力虚弱で、咳、息切れがあるものの次の諸症

効能・効果：

出血、鼻血、気管支炎

原典：医学入門

出典：

解説：

『勿誤藥室方函口訣』に「この方は吐血、咳血止まず、虚羸少気、或いは盗汗出で、飲食すすまざる者を治す。『医通』に云う内傷、熱傷肺胃、喘嗽、吐血、衄血者、生脈散加黄耆、甘草、紫苑、白芍、当帰とはこの方のことを云うなり。先輩はこの方に阿膠を加えて経験すれども、余は白朮を加えてしばしば吐血の危篤を救へり。」と記載されている。脾胃虚弱の者で出血（吐血衄血、咯血、下血）する者、あるいは出血傾向のある紫斑病に応用する。胃潰瘍の吐血にもしばしば著効を示す。漢方では「脾は統血する」と云い出血を防ぐ作用を持っていると考えている。脾虚証になると統血作用が出来なくなり出血しやすくなる訳である。帰脾湯或いは加味帰脾湯を紫斑病に用いるのも脾虚証を改善して出血傾向を改善するためである。

181.扶脾生脈湯

参考文献名		人 参	当 帰	芍 薬	紫 苑	黄 耆	麦 門 冬	五 味 子	甘 草	用法・用量
症候別治療	注1	2	4	4	2	2	6	1.5	1.5	
実用漢方処方集	注2	2	4	3	2	2	6	1.5	1.5	
黙堂柴田良治処方集	注3	2	4	3	2	2	6	1.5	1.5	*1

*1 食後、水煎温服

注1

- ・肺結核で咯血が止まず、衰弱が加わり、呼吸が苦しく、盗汗も出て、食欲のないものに用いる。
- ・瀉心湯や麦門冬湯を用いる場合よりも、一段と体力が衰微したものを目標とする。
- ・白朮を加えると止血の効がさらに強化される。

注2

- ・肺結核で咯血が止まず、衰弱が加わり、呼吸が苦しく、盗汗も出て、食欲のないものに用いる。
- ・白朮を加えると止血の効がさらに強化される。

注3

- ・適応 咽喉頭炎 肺気腫 気管支炎 肺炎 痰血 衄血 吐血 盗汗 食思不振 吐血加白朮

処方番号：182

処方名：分消湯（実脾飲）（ぶんしょうとう／じっぴいん）

処方構成：

白朮 2.5-3、蒼朮 2.5-3、茯苓 2.5-3、陳皮 2、厚朴 1-2、香附子 2、猪苓 1-3、沢瀉 2-4、
枳実（枳殼）1、大腹皮 1、縮砂 1-2、木香 1、生姜 1、燈心草 1-2

但し、枳殼を用いる場合は実脾飲とする

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以上で、尿量が少なく、ときにみぞおちがつかえて便秘の傾向のあるものの
次の諸症

効能・効果：

むくみ、排尿困難、腹部膨満感

原典：万病回春

出典：

解説：

平胃散に四苓湯を合方し、枳実、香附子、大腹皮、縮砂、木香、燈心草を加えた処方である。鼓脹と
腹水、全身浮腫に用いられる。浮腫には勢いがある、圧迫した凹みがすぐ元に戻りやすい（実証）。
腎炎による浮腫には生姜を去るがよい。

本方は鼓脹を主とし、実脾飲は腹水を主とし、やや虚証で停水が強いものに用いる。

182.分消湯

参考文献名	蒼朮	白朮	朮	茯苓	陳皮	橘皮	厚朴	香附子	香附	猪苓	沢瀉	枳実	大腹皮
処方分量集	2.5	-	2.5	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	1
診療の実際 注1	2.5	2.5	-	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	1
診療医典 注2	2.5	2.5	-	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	1
症候別治療 注3	-	-	5	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	1
処方解説 注4	3	3	-	3	2	-	2	2	-	2	2	1	-
後世要方解説	2.5	2.5	-	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	1
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
応用の実際	-	-	5	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	1
明解処方	2.5	2.5	-	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	-
漢方処方集	-	3	-	3	3	-	3	2.5	-	2.5	2.5	3	2.5
漢方入門講座	2.5	2.5	-	2.5	-	2	2	2	-	2	2	1	1
漢方医学	2.5	2.5	-	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	1
精撰百八方 注5	3	3	-	3	2	-	2	-	2	2	2	1	1
古方要方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
成人病の漢方療法	3	3	-	3	2	-	2	2	-	2	2	1	1
症例から学ぶ和漢診療学	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
漢方あれこれ	-	-	2.5	2.5	2	-	2	2	-	2	2	1	1

参考文献名	大腹	腹皮	縮砂	砂仁	木香	生姜	乾生姜	乾姜	干姜	ひね生姜	燈心草	燈心	灯心草
処方分量集	-	-	1	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-
診療の実際 注1	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-
診療医典 注2	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	1	-	-
症候別治療 注3	-	-	1	-	1	3	-	-	-	-	2	-	-
処方解説 注4	1	-	-	1	1	-	1	-	-	-	1	-	-
後世要方解説	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
応用の実際	-	-	1	-	1	3	-	-	-	-	2	-	-
明解処方	-	1	-	1	1	1	-	-	-	-	1	-	-
漢方処方集	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	1.5	-
漢方入門講座	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
漢方医学	-	-	1	-	1	1	-	-	0.5	-	1	-	-
精撰百八方 注5	-	-	-	1	1	-	1	-	-	2	1	-	-
古方要方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
成人病の漢方療法	-	-	1	-	1	3	-	-	-	-	1	-	-
症例から学ぶ和漢診療学	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
漢方あれこれ	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	-	1

【注1】 一般に腹水鼓腸初期で實證のものに用いられる。その目標は心下痞硬し、小便短小、便秘の傾向があり、その腫脹に勢があって充実し、食後飽悶を訴え、噯気、吞酸、少し食しても心下部の飽悶感に苦しむものに用いてよい。

【注2】 本方は消導の剤で、気を順らし、食滯を去り、水腫を治するのが目的である。一般に腹水鼓脹の初期で実証のものに用いる。その目標は心下部が痞硬し、小便短少、便秘の傾向があり、その腫脹に勢いがあるが充実し、食後飽悶を訴え、噯気、吞酸、少し食しても心下部の飽悶感に苦しむというものに用いてよい。

【注3】 この方は実腫に用いる方剤である。和田東郭は、水腫で心下痞硬し、小便短小にして、大便秘硬し、その腫に勢いがあるが、しっかりと堅く、指で按せば暫く凹んでも、手をはなせばたちまちもとの如くに肉脹し、その脈が沈実で力のある者は実腫である。分消湯を用いるがよいと述べている。この分消湯は腹水にも用いる。私は肝硬変症で腹水の現われたものに、この方を用いて腹水を消失せしめたことがある。

【注4】 浮腫や腹水があつて、心下部が痞硬し、小便はやや黄色で、大便秘結の傾向があり、その腹水には勢いがあるが、圧迫した凹みは、間もなく元にもどる。食後腹が張って噯気、吞酸などが起こる。少し食べても腹が張って苦しいという。しかし浮腫を圧して陥み、元にもどらず、虚腫に見えても、他の脈状などを参考にして実腫の候があれば用いてよい。虚腫に見えて実腫のものがあるものである。

【注5】 食事を一杯食べても三杯も四杯も食べたように、腹が苦しくなるという。そして鼓脹、腹水、浮腫があり、心下痞硬し、小便が少なく、大便秘結し、腫れに勢いがあるが、脈沈実のものに用いる。

処方番号：183 処方名：平胃散（へいいさん）

処方構成：

蒼朮 4（白朮も可）、厚朴 3、陳皮 3、大棗 2、甘草 1、生姜 0.5-1

用法・用量：

原則として湯

（1）散：1回 2g 1日 3回

（2）湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以上で、胃がもたれて消化が悪く、ときに吐きけ、食後に腹が鳴って下痢の傾向のある次の諸症

効能・効果：

食べ過ぎによる胃のもたれ、急・慢性胃炎、消化不良、食欲不振

原典：太平惠民和劑局方

出典：

解説：

胃に水がたまり、消化が悪くなってみぞおちの辺がはり、食欲は衰え、食べればグルグルと腹が鳴るようなときに用いる健胃剤である。

原方では、生姜、大棗以外を粉末とし、生姜片と乾燥した大棗を二つ割にしたものを加え、水で煎じたのち、生姜、大棗だけを引き上げ、残りを熱いうちに服用するか、食前の空腹時に生姜、大棗以外の粉末に食塩少々を添加し、熱湯でといて熱いうちに服用するとなっているが、一般には上記6種を煎じた液だけを用いている。本方は加味平胃散、香砂平胃散、不換金正気散、藿香正気散、分消湯、五積散などの基本処方であり、胃苓湯は本方と五苓散の合方である。

朮は蒼朮を使用することが望ましい。

183.平胃散

参考文献名		蒼朮	厚朴	陳皮	甘草	生姜	大棗
和剤局方 卷之三	注1	5斤	50両	50両	10両	-	-
診療医典	注2	4	3	3	1	2	2
症候別治療		4*1	3	3	1	2	2
処方解説	注3	4	3	3	1	1*2	2
応用の実際	注4	4*1	3	3	1	2	2
医学処方解説	注5	6	4.5	4.5	1.5	3	3
漢方あれこれ	注6	4	3	3	1	2	2

*1 朮 *2 乾生姜

〔注1〕 治脾胃不和，不思飲食，心腹脇肋脹滿刺痛，口苦無味，胸滿短氣，嘔噦惡心，噫氣吞酸，面色萎黃，肌体瘦弱，怠惰嗜卧，体重節痛，常多自利，或發霍亂，及五噎八痞，膈氣飜胃，並宜服。

常服調気暖胃，化宿食，消痰飲，辟風寒冷濕四時非節之氣。

〔注2〕 本方は宿食を消化し，胃内停水を去るものである。自覚症状として食欲不振，腹部膨滿，心下痞塞，食後に腹鳴して下痢を訴える。脈も腹もまだはなはだしく衰えぬものに用いる。貧血を来たし，腹筋が極度に弛緩した虚証のものに用いてはならない。本方は右の目標をもって，急性慢性胃カタル，胃アトニー，胃拡張などに応用される。

〔注3〕 やや実証であって，胃に宿食と水が停滞し，消化障害をきたして心下部不快，痞滿を訴えるものに用いる。多くは加減方を行なって広く諸消化器病，その他に応用される。

〔注4〕 胃の消化がわるく，宿食，停水が停滞して，心下部が痞えて膨滿感があり，食後腹鳴がおこって，時に下痢するものである。余り虚証ではなく，脈・腹ともそれほど軟弱ではない。

〔注5〕 此方ハ宿食ヲ化シ，痰飲ヲ消スト云フガ眼目ニテ，脾胃消化器系ニ水毒食毒ノ高クアルヲヒトシク平カニスルト云フ意ニテ平胃散ト名付ケタルモノナリ。即チ食消化セズ，心下ニ痞塞スルニヨツテ水食ノ二毒胃腸内ニ停滞シ，病人食欲不振，心下痞塞ヲ訴ヘ，食後腹鳴リ下利スルトキハ反テ爽快ナリト稱シ，脈腹共ニ未ダ虚弱ナラザルモノニ用ユ。

〔注6〕 食べすぎなどからきた急性のものには平胃散が使われる(胃炎)。

処方番号：183A 処方名：香砂平胃散（こうしゃへいいさん）

処方構成：

蒼朮 4-6（白朮も可）、厚朴 3-4.5、陳皮 3-4.5、甘草 1-1.5、縮砂 1.5-2、香附子 2-4、
生姜 0.5-1（ヒネシヨウガを使用する場合 2-3）、大棗 2-3、藿香 1（藿香はなくても可）

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で、食べ過ぎて胃がもたれる傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：

食欲異常、食欲不振、急・慢性胃炎、消化不良

原典：万病回春

出典：

解説：

平胃散に香附子、縮砂、藿香が加えられたものである。万病回春の処方とされるが、原方に厚朴、大棗はなく、枳実、木香があり、出典は不明である。加味平胃散と同様に消化促進的に用いられる平胃散加味方といえ、ときには食欲の調節にも役立つと考えられる。

朮は蒼朮を使用することが望ましい。

183A.香砂平胃散

参考文献名		蒼朮	厚朴	陳皮	甘草	縮砂	香附子	枳実	木香	生姜	大棗	藿香
万病回春 卷上飲食	注1	1錢		1錢	5分	7分半*1	1錢	8分	5分	1片		8分
丹溪心法附餘 卷三	注2	8兩	5兩	5兩	3兩	3兩	3兩			-		
診療医典	注3	4	3	3	1	1.5	4			2	2	1
処方解説	注4	4	3	3	1	2	2			1*2	2	
医学処方解説	注5	6	4.5	4.5	1.5	1.5	3			3	3	
処方分量集		4	3	3	1	1.5	4			1*2	2	1
第24回東洋医学会講演要旨 昭和48年名古屋	注6											

*1 砂仁 *2 乾生姜

〔注1〕 治傷食，右剉一劑，姜一片，水煎服，肉食不化，加山查草果，米粉麩食不化，加神麩麦芽，生冷瓜果不化，加乾姜青皮，飲食傷者，加黃連乾葛烏梅，吐瀉不止，加茯苓半夏烏梅去枳実。

〔注2〕 加減平胃散抜粹方：若氣不欽快中脘痞塞，加縮砂仁香附子各三兩，生姜煎服。

〔注3〕 輕症の胃アトニー症で心下痞，腹部膨滿感のある者には，平胃散をもちいる。また胃に刺戟を与えて，機能の亢進をはかる目的で，香砂平胃散をもちいることもある。

〔注4〕 一層消化を助ける。

〔注5〕 平胃散：又方攢辨解にいわく「食後食化せず，心下滞り，又食後腹鳴り下利スレバ却テ快キ症ニ用ユ。心腹刺痛ノ者ニ用ユル主治ヲ云ヘドモ今試ルニ腹痛アル者ニハ効アラズ。此方ニ香附子砂仁ヲ加ヘ，心下痞脹シテ食スルコトヲ得ズ，或ハ動氣強キ症ニ用ユ。即チ香砂平胃散ナリ。後世ノ説ニ香附子宿砂ハ食積ヲ消スト云フ是レナリ」と。

〔注6〕 香砂平胃散は胃腸の諸機能を調整する作用があり其の結果異常な食欲が正常に戻るのではないかと考えられる。老人問題が漸く一般に考えられるようにしつつある現在，この種の患者に用いられる機会が有ると思われる。